

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の学力向上のための一実践例 ～データで保護者に直接語りかける～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2010-06-02 キーワード (Ja): 生涯学習, 学力, 学力向上, 保護者, 生活習慣, 体力, モラル キーワード (En): 作成者: 西本, 裕輝, Nishimoto, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17074

沖縄県の学力向上のための一実践例

～データで保護者に直接語りかける～

The Example of 1 Practice for Improvement in the Academic Ability in Okinawa Prefecture

—Appealing to a Guardian Directly Using Data—

西本 裕輝*

キーワード：生涯学習、学力、学力向上、保護者、生活習慣、体力、モラル

はじめに

これまで私は約10年間、一研究者として沖縄の低学力問題研究に携わってきた。そして諸種の学力調査から、沖縄の学力が他県に比べかなり低いこと、家庭の教育力の弱さ、特に生活習慣が確立されていないことが低学力に深く関わっていることを、社会学の文化的再生産論の立場から指摘してきた。そのことは奇しくも2007年から始まった文部科学省による「全国学力・学習状況調査」（以下、全国学力調査）の結果で改めて裏付けられることとなった。沖縄はこの3年間で全24科目中、実に22科目で最下位となったのである。そして後に詳しくふれるが、生活習慣に関する項目でも、例えば、朝食摂取率46位など、ほぼ最下位となっている。

私は研究を進める中で、沖縄の学力向上のためにまず必要なことは、子どもに責任を押しつけることではなく、保護者の意識改革を行うことであり、そのためには「データで直接保護者に語りかける」ことが重要であると考えようになった。実際、文科省の学力調査が始まる以前から、各種講演会を通して、家庭環境と学力の関係についての学力調査の分析結果を保護者や児童・生徒の前で公表してきたが、文科省調査が始まってからは、学力問題に関する社会の関心が高まり、飛躍的に講演依頼が増えたことにより、ますます「私にできることはこれだ」と確信するに至った。

後にもふれるが、データで直接語りかけることはかなりの説得力を持つと思われる。例えば、「本校での学力調査データの分析結果によると、朝食を食べている子どもと食べていない子どもでは100点満点で20点の開きがあります」と言いながらグラフを見せる。多くの保護者は、朝食をしっかりと食べることはよいということは常識的にわかっている。しかしこのように具体的に数値で示されると、さらに実感を持って理解することができるようである。そのことは「こんなに朝食が重要だとは思わなかった」「これほど睡眠が学力に影響を与えているとは思わなかった」という講演後の参加者の感想からもうかがえる。

*琉球大学大学教育センター准教授

ここではこのようなことも含めて、私がこれまで沖縄の学力向上のために実践してきたこと、特に2009年度からは琉球大学の地域貢献プロジェクト「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム(21 COCEF)」⁽¹⁾の支援を受けて実践していることを一例として紹介し、沖縄の低学力問題解決のための一提案を行いたい。

なお、本取組は沖縄の学力問題解決という側面と共に、「地域貢献プロジェクト」の一環である性格上、沖縄県民のための生涯学習機会の提供という側面も持つ。県民への子育て情報の提供ということも目的に含まれるうえ、本文中でふれるように、「社会全体で子どもを守り育てる」という地域の教育力、社会教育の視点も持ち合わせる。

1. 2009年度の講演活動等

先ほど述べたように、沖縄の低学力問題解決のためには、子ども自身よりもその保護者に現状を理

表1) 2009年度講演活動一覧

番号	年 月 日	演 題 等	対 象
1	2009年5月11日	「沖縄の学力向上のための一実践例 ～保護者にデータで直接語りかける～」 (於：琉球大学教育学部)	大学教員
2	2009年5月24日	「普天間中学校の学力向上を目指して」 (於：宜野湾市立普天間中学校)	全校生徒 保護者 中学校教員
3	2009年6月18日	「子どもの生活リズムと学力」 (於：名護市立屋部中学校)	保護者 小中学校教員
4	2009年6月21日	「全国学力テストの分析による本校の特徴と課題」 (於：名護市立羽地中学校)	全校生徒 保護者 中学校教員
5	2009年8月2日	「沖縄の学力問題と家庭環境の影響」 (於：沖縄尚学高等学校)	小中高教員 一般社会人
6	2009年10月26日	「全国学力テストの分析による沖縄の課題」 (於：那覇市立上山中学校)	全校生徒 教員
7	2009年11月15日	「名護小学校の学力向上のために」 (於：名護市立名護小学校)	全校児童とその 保護者、教員
8	2009年12月20日	「上間小学校の学力向上のために」 (於：那覇市立上間小学校)	5、6年生とその 保護者、教員
9	2010年1月30日	「沖縄の子どもの生活リズムと学力・体力の関係」 (於：ドレミ保育園)	保護者
10	2010年2月10日	「沖縄の学力問題～家庭・地域の教育力と沖縄の子どもの 学力・体力・モラルの関係～」 (主催：国頭教育事務所)(於：名護青年の家)	国頭教育事務所 管内の教員、社 会教育主事
11	2010年2月20日	「食育フォーラム」 (主催：琉球新報社、共催：キューピー) (於：かりゆしアーバンリゾート那覇)	一般社会人
12	2010年2月26日	「沖縄の子どもの学力向上・体力向上のために～家庭の 教育力・地域の教育力で子どもを守り育てる」 (主催：沖縄県教育委員会)(於：伊是名村産業支援センター)	小中教員 保護者
13	2010年3月25日	琉球大学第2回入試フォーラム 「沖縄の低学力問題と高大接続」 (主催：琉球大学アドミッション・オフィス)(於：琉球大学法文学部)	高校教員 大学教職員

解してもらうことが重要である。朝食の摂取と学力の関係があったとしても、実際に朝食を準備するのは子ども自身ではなく、多くの場合その保護者である。そうした家庭の支援、バックアップがあってこそ、子どもの学力向上の素地ができる。そしてこうしたことを理解してもらうためには、できるだけ講演の機会を多く持つなどして、データで現状を訴えることが必要である。したがって筆者は、依頼された講演は他の講演予定と重なっていない限りすべて引き受け、マスコミの取材にも積極的に応じている。このような機会を多く持ち、繰り返しデータを提示することにより、県民全体の意識に浸透していけば、学力向上の可能性も高くなっていくのではないかと考えている。

表2) 2009年度コメント等一覧

番号	年 月 日	雑 誌 等	内 容
1	2009年7月4日	新聞コメント	日本子ども社会学会で発表した内容を琉球新報紙上で紹介。県単位で分析すると学力と経済状況はほぼ無相関である一方で、学力と生活習慣の相関は高いことなどについて述べた。
2	2009年9月6日 ～13日	連載	琉球新報紙上にて連載を行った。内容は、文科省の実施した「全国学力・学習状況調査」のデータを用いて、学力最下位の沖縄と、学力1位で知られる秋田とを比較しながら、沖縄の学力向上のための提言を行った。学力の高い県は体力もモラルも高いことに注目し、沖縄の学力が低いのは家庭の教育力の弱さ、それに関連した生活習慣の不確立を指摘した。
3	2009年9月	雑誌コメント	学力問題の専門家として、雑誌『中央公論』にコメントを発表。
4	2009年11月1日	雑誌コメント	学力問題の専門家として、日本教育社会学会で発表した内容について雑誌『サンデー毎日』で紹介。
5	2009年11月27日	TVコメント	琉球朝日放送のニュース番組「ステーションQ」で食育について専門家としてコメント(2009.11.27オンエア)。
6	2010年1月19日	TVコメント	日本テレビの情報番組「スッキリ!!」で朝食と学力の関係について専門家としてコメント(2010.1.19オンエア)。
7	2010年3月20日	新聞掲載	シンポジストとして参加した「食育フォーラム」(表1の11)の様子が琉球新報紙上に掲載された。

そうした中で2009年度は、多くの講演や雑誌等へのコメントを行うことができた。幸い講演の評判は比較的良好で、その評判をもとにまた新たな講演依頼が来るという状態である。

表1は2009年度の講演をまとめて一覧にしたもの、表2が雑誌へのコメント等を一覧にしたものである。21COCEFの支援もあり、このように多くの機会を持つことができた。このような機会を多く持つことによって、県内の保護者や教育関係者をはじめとして、一般社会人に沖縄の学力向上のために必要なことが徐々に理解されれば幸いである。

2. 講演の内容

次に具体的に、講演の中で、どのように保護者にデータで語りかけているかについて述べてみたい。実際の講演の内容にふれながら、沖縄県の厳しい状況について概観し、沖縄の学力問題解決のために必要なことについて、データに基づき検討する。

その際のデータとは、文科省の実施する「全国学力テスト」によって収集されたものである。まずはそのあたりから解説していきたい。

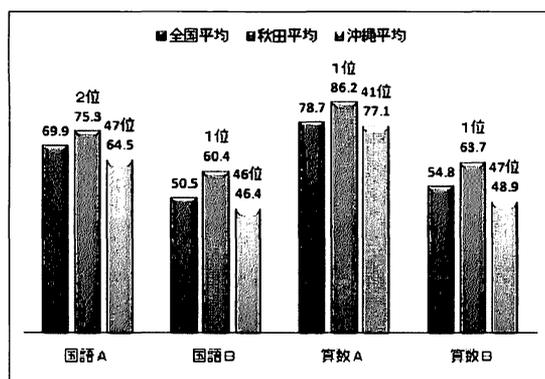
(1) 全国学力テストとは

「全国学力・学習状況調査」は子どもの学力低下が指摘される中、全国的な状況を把握し課題を明らかにする目的で、2007年から全国の小学6年生、中学3年生全員を対象として文部科学省が43年ぶりに実施しているもので、2009年で3回目⁽²⁾。学力テスト（国、算・数）と生活状況を問う質問紙調査からなっている。一部の私立校が参加していないものの、すべての公立小中学校が参加、全国の約220万人以上が参加しており、現時点でもっとも信頼性の高い学力調査であると言える。沖縄県内に限って言えば、私立を含むすべての小中学校が参加している（2008年度から1私立小学校が不参加）。沖縄県は8科目すべてで2年連続最下位、2009年も8科目中6科目で最下位となっている。

例えば小6の場合は、国語A、B、算数A、Bの4科目。Aは知識を問う基礎問題、Bは活用を問う応用問題である。

ちなみに、本調査であらためて沖縄は学力最下位ということが確認されたわけであるが、学力1位は秋田県であることが明らかになった。ここでは随時、秋田と沖縄の比較を含めてデータを提示する。

その一例がグラフ1である。小学生の学力テストの結果である。ちなみにグラフの数値は各科目の正答率の平均であり、100点満点の得点とほぼ同義である。沖縄の得点は、全国平均や秋田平均と比べると、かなりの差がついていることが明らかになる。また順位で見ると、依然として沖縄の学力問題が厳しい状況にあるということが明らかになる。

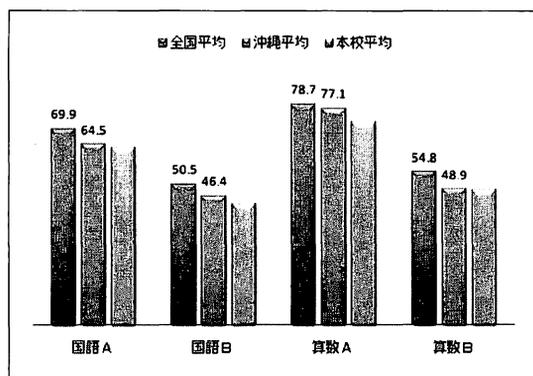


グラフ1) 秋田と沖縄の学力テストの得点比較

(2) 学力テストの結果の提示

筆者は、月1～2回のペースで小中学校を中心に講演活動を行っているわけであるが、多くの場合、事前に学力テストのデータを各校から受け取り、分析をした上でそれを提示しながら講演を進める。聴衆の保護者からしても、一般論を話されるよりも、我が子の受けたテスト結果を見ながら、「本校の平均点は全国平均には届きませんが沖縄平均は超えています」や「本校の子どもたちは、朝食の摂取率が全国平均に比べて10ポイント低いです」といったような言い方をされれば、より身近な問題としてとらえることができると考えられるからである。

次のグラフ2は、その一例である。これはある小学校で講演した際の資料として提示したグラフである。便宜上、本校平均の得点は削除している。学校別の平均点は、校長の許可があれば公表してよいことになっているが、その平均点が一人歩きすることも懸念される。講演の際は、念のため具体的平均点は提示していない。ただし、全国平均や県平均に比べて上か下かについてはグラフから判別できるようになっている。



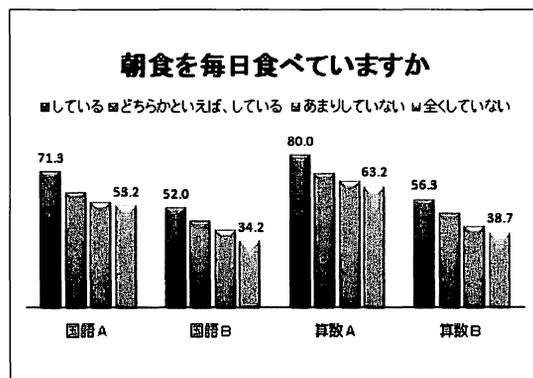
グラフ2) 学力テストの得点比較

(3) どんな子どもの学力が高いのか～基本的な生活習慣と学力

次に2009年度の全国学力テストの集計結果を用いて、どんな子どもの学力が高いのかについて、特に基本的な生活習慣、家庭の教育力との関係から見ていく。各校独自のデータを分析する前に、まずは全国データから、ある程度の傾向をつかんでおくことがその狙いである。なお、この全国データは文科省がHP上で公表している内容を加工したものである。

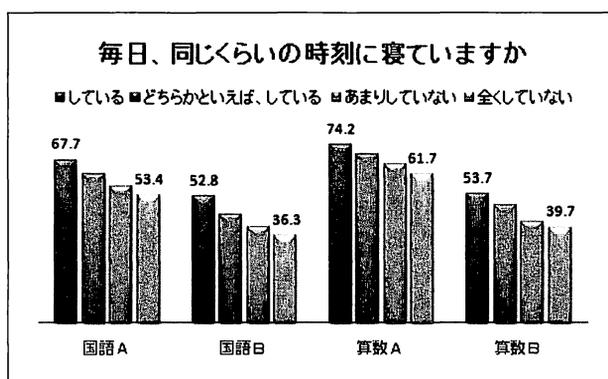
基本的な生活習慣と言えば、まずは「早寝早起き朝ごはん」である。文科省も「早寝早起き朝ごはん国民推進運動」を展開している。それは、子どもの学力向上や健康の維持にとって、そうした生活リズムを整えることが、極めて重要であるという認識からである。

グラフ3は朝食の摂取状況と学力テストの得点の関係を見たものである。この表からわかるように、どの科目でも朝食の摂取状況のよい子ほど、学力得点が高くなっていることがわかる。おおむね20点の差がついている。

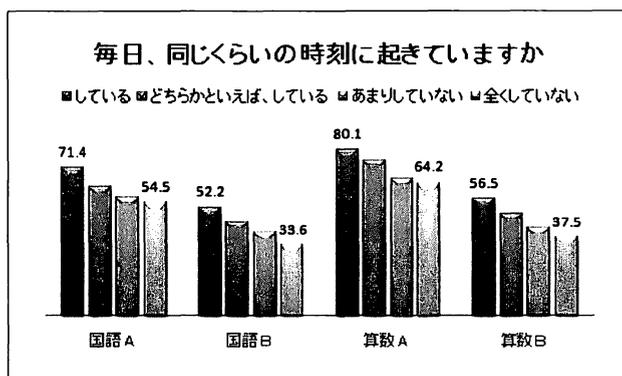


グラフ3) 朝食の摂取状況と学力の関係

次に睡眠についてである。

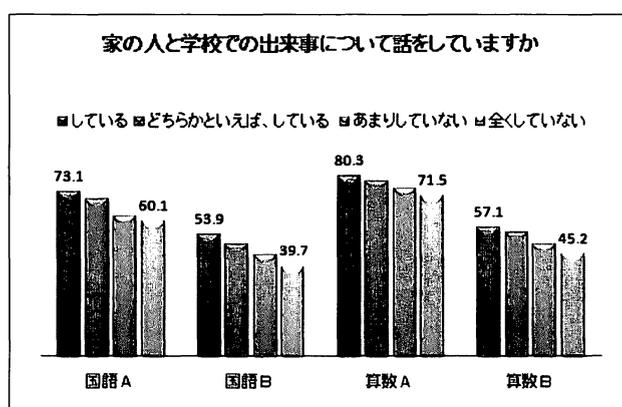


グラフ4) 規則正しい就寝と学力の関係



グラフ 5) 規則正しい起床と学力の関係

グラフ 4、5 により、規則正しい睡眠がとれている子どもほど学力が高いことがわかる。



グラフ 6) 家の人との会話（コミュニケーション）と学力の関係

さらにグラフ 6 は、家庭内における親子の会話を示す項目についてまとめたものである。コミュニケーション量が多いほど学力が高くなっていることがわかる。この項目は、保護者の子どもに関する関心を示す項目であると言える。会話が不足すれば、子どもの様子が見えにくくなり、学習面や友達関係の悩みを見逃すことにもなりかねない。

このように見てみると、家庭での生活習慣がしっかりと身につけている子どもほど学力が高いということがわかる。これは学力には本人の努力ももちろんのこと、家庭の支援がより重要であるということを示している。言い換えれば、保護者の教育意識の高さ、子どもへの関心の高さが子どもの学力に影響していると言える。

例えば、朝食は、特に子どもが小学生の場合、子ども本人が勝手に作って食べるわけではなく、多くの場合、保護者が与えるものである。睡眠も子どもが自然に早寝早起きの習慣を身につけるのではなく、多くの場合、保護者のねばり強い声かけの中で身につく習慣である。

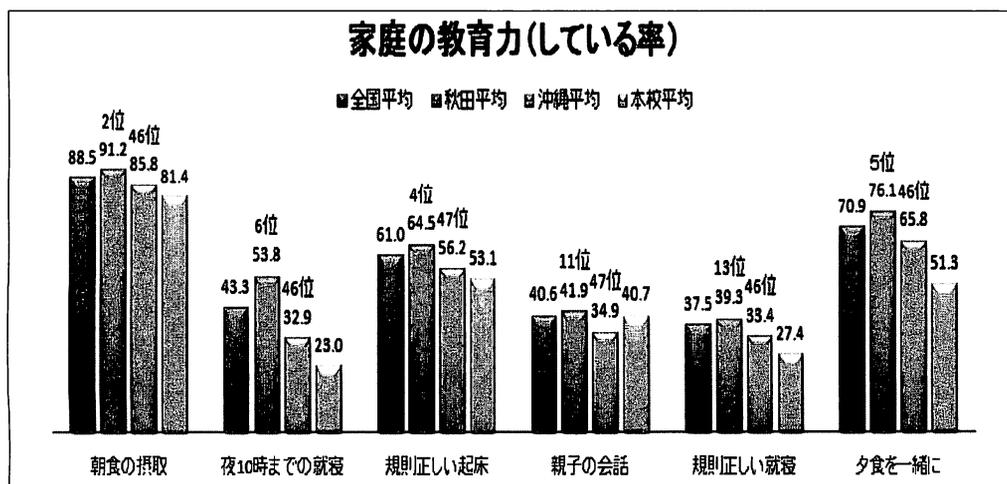
また朝食を基点として、生活リズム全体を整える効果もあると考えられる。寝坊しては朝食を食べることができない、だから早く起きる、早く起きるためには早く寝ないといけない…といったように、朝食を基準に子どもの成長にとって大切な規則正しい生活習慣が身につけていくこともあるだろう。

いずれにしても、保護者の教育意識を含めたいわば「家庭の教育力」が重要と言える。

(4) なぜ沖縄の学力は低いのか～家庭の教育力の弱さ

しかし残念なことに、沖縄はこの「家庭の教育力」が弱いと言わざるを得ない。これが学力の低い原因であると私は考えている。

グラフ7を確認してもらいたい。これは先にふれた家庭の教育力を示す項目について、その実施率と県別順位（秋田と沖縄の47都道府県中の順位）を小学6年生の場合で示したものである。



グラフ7) 沖縄の家庭の教育力の弱さ

これを見てわかるように、沖縄は学力のみならず、生活習慣や家庭の教育力を意味する項目の順位も最下位もしくはそれに近い順位となっている。

例えば、朝食の摂取率を見てみると、沖縄の子どもの摂取率は85.8%で、順位にすると47都道府県中46位とほぼ最下位である。一方、学力1位で知られる秋田は、摂取率91.2%で全国2位となっている。

同様に、夜10時までの就寝率では、沖縄32.9%で46位であるのに対し、秋田は53.8%で6位となっている。他の生活習慣、家庭の教育力を示す項目でも同様の結果が出ている。

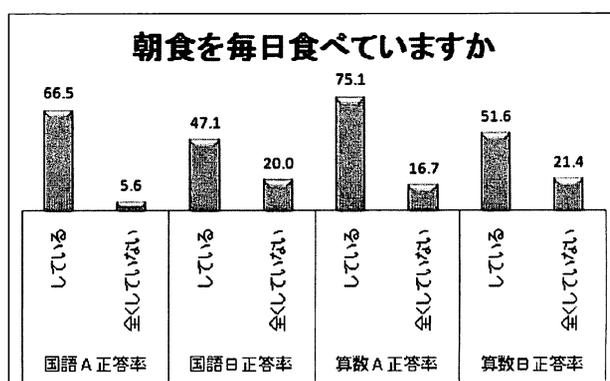
このように沖縄の学力が最下位なのは、生活習慣や家庭の教育力を意味する項目においても全国最下位となっていることと大きく関係していると思われる。

なお、それぞれ一番右に示す棒グラフは、ある小学校のデータを追加したものである。保護者に対応策を訴える際、沖縄平均のみならず、本校平均を一緒に示すことによって、より身近な問題としてとらえることができると思われるため、小中学校における講演の際は、必ず本校平均も一緒に示すことにしている。

例えば「本校の夜10時までの就寝率は全国46位の沖縄平均よりもさらに低いですよ」という示し方をすれば、より危機感を持って調査結果を受け止めてもらえるだろう。

(5) ある学校の実態～本校データから

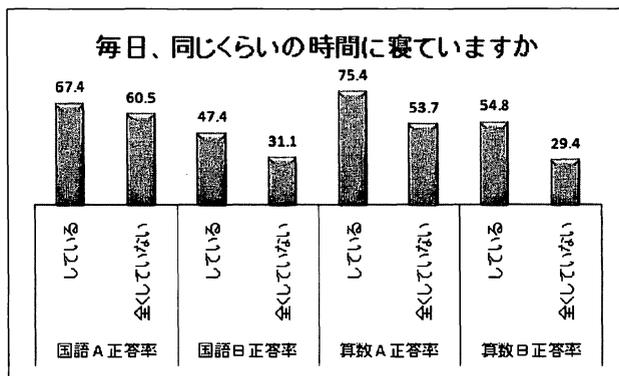
では次に、実際に講演対象校のデータのみを使って分析結果を示したい。先ほど全国のデータを示して、例えば朝食を摂取する場合としない場合の差を示したが、それよりも「本校の場合、朝食を摂取している子としていない子の差はデータではこうなります」ということを示す方がよりリアリティがあり、聴衆を惹きつけることができるだろう。したがって、講演の際には、必ず対象校データを用いた分析結果を示している。



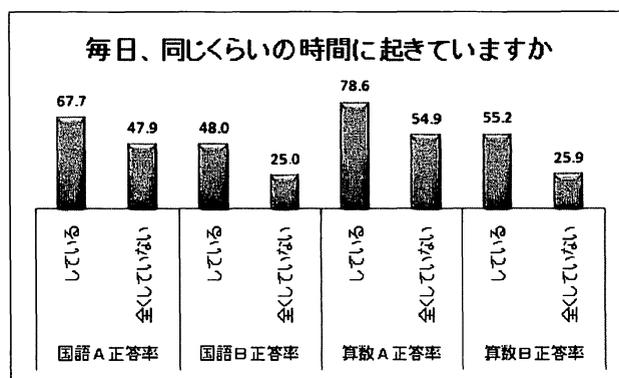
グラフ8) 朝食の摂取状況と学力の関係（本校データ）

例えばグラフ8はある小学校の朝食を食べている子と食べていない子の学力テストの差であるが、全国データで見る場合よりも、より大きな差が出ていることがわかる。すなわち、食べている子と食べていない子の学力差は30点から60点程度ある。

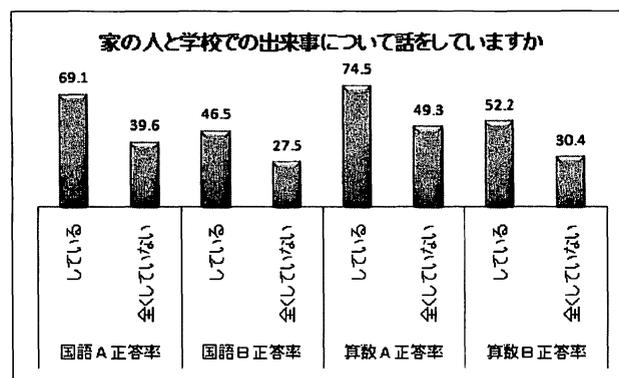
なお、全国データの場合では、4件法で結果が示されているが、私が講演をする場合は、しているか全くしていないかの2件法で省略して示している。なぜならば、多くの場合、1学校のデータのみではサンプル数が100前後で結果が安定しない場合が多いからである。2件法であれば、している子としていない子の差が、ある程度安定してクリアに表現できる場合が多い。



グラフ9) 就寝時刻と学力の関係 (本校データ)



グラフ10) 起床時刻と学力の関係 (本校データ)



グラフ11) 家の人との会話 (コミュニケーション) と学力の関係 (本校データ)

グラフ9~11も同様に、全国データの傾向とほぼ同様の結果が出ている。

以上のような対象校データを用いた分析により、全国データで示された結果をよりリアルに受け止めることができるだろう。

3. 生活習慣・家庭の教育力と学力・体力・モラルの関係

以上では、「早寝早起き朝ごはん」等の家庭における生活習慣が、子どもの学力に及ぼす影響について検討してきた。こうした生活習慣は家庭の教育力と言い換えてもよいだろう。

しかしながら講演していると希に、「うちの子は学力低くてもいいんです」と発言する保護者の方がおられる。つまり、生活習慣が多少整わなくて学力が低かったとしても、伸び伸び健やかに育ててくれればそれでよいといった意見である。この発想は、例えば教育関係者の間でもよく見られ、「沖縄の子どもは学力は低いかもしれないが、外を元気に走り回っていて体力はあるから大丈夫だ」という言い方をするのをよく耳にする。そうした保護者や教育関係者には次のようなデータで説得し、やはり生活習慣の確立が重要であるということを説明する。

すなわち、生活習慣の乱れは子どもの健康面や体力面、さらには人格面にも悪影響を与えている可能性を示唆するデータを示すのである。講演の種類にもよるが、必要に応じて子どもの体力やモラルの問題についてもふれることがある。以下ではその内容をデータとともに示したい。

(1) 沖縄の子どもたちの体力

文科省は2008年4月～7月に「全国体力・運動能力・運動習慣調査」（以下、全国体力調査）を実施し、2009年1月に結果を公表した。それによると、沖縄の小学生（5年生）の順位は、47都道府県中、総合で男子で31位、女子33位と決して高くない。中学生（2年生）ではさらに悪く、男子33位、女子38位となっている。種目別に見ると特に持久力や走力に関する項目は最下位に近い。

一方、秋田の順位は男女とも全国2位であり、学力2位の福井は男女とも1位である。睡眠など生活習慣の確立が健康な体をつくり、学力にも体力にも好影響を与えていることが推察できる。

試みに、県別に学力・体力・生活習慣の順位を表にまとめてみた。抽出したのは、学力1位で知られる秋田、2位の福井、学力最下位の沖縄、46位の北海道である。この表で見ても、生活習慣の確立されている県の学力・体力は高く、逆に沖縄など確立されていない県は低いことがわかる。例えば、学力1位の秋田は朝食摂取率でも2位と高い。

ここでは上位2県、下位2県を取りあげたが、これだけでは偶然性も高いので、後に、47都道府県すべてを網羅した上、より詳細な分析を行う。

なお、ここで取りあげた全国体力調査（2008）は小学5年生と中学2年生が対象であったが、全国学力調査（2009）はその子どもたちが小学6年生と中学3年生になった時点でされており、対象は一致する。

表3）学力・体力と生活習慣の関係（小学生）

学力順位	都道府県	朝食摂取率順位	起床時刻順位	体力順位(男子)	体力順位(女子)
1	秋 田	2	4	2	2
2	福 井	3	1	1	1
46	北海道	43	40	45	39
47	沖 縄	46	46	31	33

ところで余談であるが、全国体力テストの沖縄県の結果で、唯一全国トップレベルの種目がある。それは投力、小学生のソフトボール投げ（中学生のハンドボール投げ）である。

小学生は男子で2位、女子で4位、中学生は男子で1位、女子で4位である。ちなみに、最新のデータ全国体力調査（2009）でも、小学男子1位、女子5位、中学男子1位、女子4位となっており、依然として全国トップレベルと言える。

持久力や走力に関する種目では、小学生では、20メートルシャトルランで男子40位、女子42位、50

メートル走で男子37位、女子45位、中学生では、持久走男子44位、女子46位、20メートルシャトルラン男子45位、女子46位、50メートル走38位、女子45位とほぼ最下位である。特に女子の成績が悪いのが目立つ。その反面、投力に関しては驚異的とも言える成績である。これほど成績にばらつきのある県も珍しいと言えよう。

総合的に見て、沖縄の子どもたちの体力は危機的な状況にあると言えるが、このような偏りが見られる点については、沖縄の子どもたちの特徴にも関係していると思われる。それは「最後までやり抜くねばり強さ」の弱さである。投げるだけであれば5秒もあれば終了する。ところが、持久走は何分もかけて走らなければならない。そのような最後まで頑張り抜く、全力を出し切ることが必要な種目には、弱さが出るのではないだろうか。

この弱さは学力テストについても共通する問題が存在すると思われる。筆者は、文科省が全国学力調査を開始する以前より、沖縄を含む全国各地で学力調査を実施し、その比較を行ってきたが（例えば、西本 2002;2008）、沖縄の子どもの答案用紙を他県と比較したときに、ある特徴に気づかされたことがある。すなわち沖縄の子どもの答案用紙には「落書き」が多いのである。しかもそれは、解答が終わって余裕で落書きしているのと言うよりはむしろ、途中で解答を諦めてしまっている結果なのである。その調査の時も、沖縄の子どもの学力は他県の子どもの比でもっとも低かったため、最後まで頑張り抜く力の欠如に該当する事例と言えるだろう。文科省の全国学力調査（2007）の結果で、無答率が全国平均の約2倍であったことからしても、どうやらそうした傾向は沖縄の子どもたちには常に見られると言ってもよいだろう。

このように、沖縄の子どもの体力が他県に比べて残念ながら劣っているとわざわざを得ないものの、そうした特徴も加味して考える必要があるだろう。

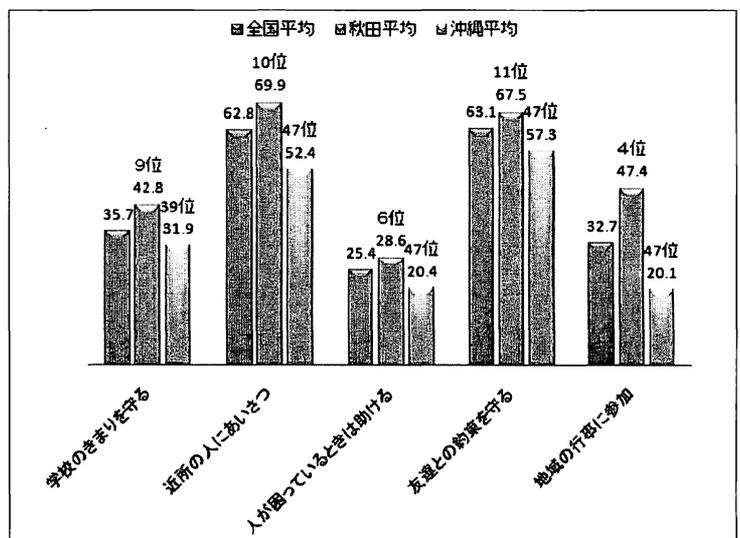
(2) 沖縄の子どもたちのモラル

「沖縄の子どもたちは学力は低いけれども体力はある」という言説が幻想であることについて指摘したが、さらに「沖縄の子どもたちは学力は低いけれども素直でよい子が多い」ということもよく言われる。次にこの問題について、文科省の全国学力調査データから確認しておきたい。

グラフ12からわかるように、小学6年生の結果では、「近所の人にあいさつをする」のは52.4%で47位、「人が困っているときは進んで助ける」のは20.4%で47位、「友達との約束を守る」は57.3%で47位など、モラルに関する項目も順位にするとほぼ最下位となっている。

これらは家庭におけるしつけの問題、家庭の教育力とも関連していると言えるだろう。

また、少なくともこのデータからは、「沖縄の子どもは素直で優しい」とは言い切れないようである。直接は関連しないかもしれないが、記憶に新しいところで、2009年11月に沖縄のうるま市で米盛星斗くんが同級生らから集団暴行を受け亡くなるという痛ましい事件が起こった。2003年には北谷町で同様に事件が起こり、2000年にも那覇市で同様の事件が起こっている。このような事件は定期的には起こっているとさえ、沖縄は平和な島と言い切れる状況にはないと言える。沖縄の少年犯罪の発生率も決して低くはない。



グラフ12) 沖縄のモラルの低さ（している率：小学生）

以上のように、沖縄の生活習慣の乱れ、学力・体力・モラルの低下はすべて、しつけを含めた家庭の教育力の弱さが関連していると言える。そしてこれは子どもの責任と言うよりは、保護者の教育意識の問題であろう。

教育学では伝統的に、知育・体育・徳育（学力・体力・モラル）のバランスのよい発達が課題となっている。一つでも欠くとバランスは崩れてしまう。沖縄の学力向上は、生活習慣の確立や体力向上などとセットで考える必要がある。学力低下、体力低下、モラルの低下は別々の問題ではなく、同時に起こる問題である。概念図にすると図1のようになるだろう。

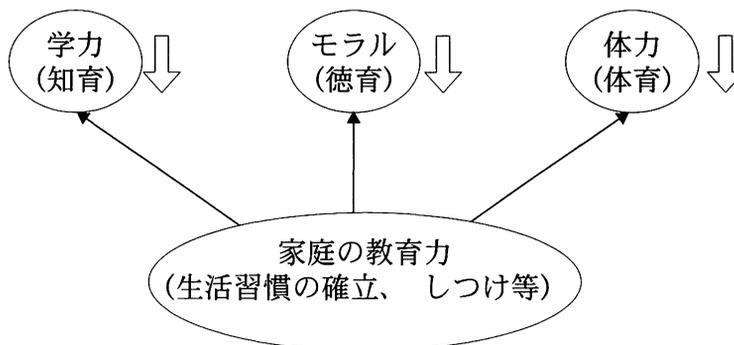


図1) 学力・体力・モラルの関係の概念図

(3) 家庭の教育力と学力・体力・モラルの関係

このように、沖縄における生活習慣の乱れ、学力低下、体力低下、モラルの低下は、すべてしつけを含めた家庭の教育力の弱さが関わっていると推察できる。

ただし、これはあくまでも秋田と沖縄2県のみにおける比較の結果であり、偶然の結果かもしれない。そこで次には、文科省の全国学力調査の公表データ（2009）から筆者が作成した47都道府県分のデータベースに基づいて、以上のようなことを統計学的に明らかにしたい。

まず試みに、各項目間の関係を相関係数により見てみたい。家庭の教育力からは、朝食摂取率、規則正しい起床（している率）、学力は国語A（正答率）、体力は男子体力（体力得点）、モラルからは「友達との約束を守る」（している率）をそれぞれ選択し、関連を見た。

表4) 学力・体力・モラルに関する項目の相関係数分析
各項目間の相関係数

	朝食摂取率	規則正しい起床	国語A	男子体力	友達との約束を守る
Pearsonの相関係数	1	.463**	.426**	.578**	.564**
有意確立（両側）		.001	.003	.000	.000
N	47	47	47	47	47
Pearsonの相関係数	.463**	1	.482**	.497**	.605**
有意確立（両側）	.001		.001	.000	.000
N	47	47	47	47	47
Pearsonの相関係数	.426**	.482**	1	.482**	.458**
有意確立（両側）	.003	.001		.001	.001
N	47	47	47	47	47
Pearsonの相関係数	.578**	.497**	.482**	1	.430**
有意確立（両側）	.000	.000	.001		.003
N	47	47	47	47	47
Pearsonの相関係数	.564**	.605	.458**	.430**	1
有意確立（両側）	.000	.000	.001	.003	
N	47	47	47	47	47

**．相関係数は1%水準で有意

表から明らかなように、すべての項目間で有意な結果が得られた。

例えば、朝食の摂取は学力（国語A）、体力（男子体力）、モラル（友達との約束を守る）と有意な関係となっている。

しかしながら、このようにこれまで取りあげたすべての項目ごとに同様の分析をすると、煩雑になり、情報量も多くなってしまふ。

そこで主成分分析により、情報の縮約、変数の統合を行う。まず、国語A、B、算数A、Bの県別平均点を用い、「学力」という変数を作成した。クロンバックの α 係数は.949と非常に高かった。

同様に、体力調査の県別得点を男子と女子で統合した変数を「体力」（ $\alpha=.951$ ）、学校のきまりを守る率、友達との約束を守る率、人が困っているときは進んで助ける率、近所の人にあいさつする率を「モラル」（ $\alpha=.810$ ）、朝食摂取率、規則正しい起床（「している率」）、夜10時までの就寝率、夕食を一緒に食べる率を「家庭の教育力（生活習慣）」（ $\alpha=.705$ ）として情報を縮約した。

そうして抽出した4つの変数間の相関を示したものが次の表である。

表から明らかなように、家庭の教育力は、学力・体力・モラルそれぞれと有意な関係にあることが見出された。相関係数はそれぞれ.322**、.652**、.711**であり、学力よりもむしろ体力やモラルとの相関が高い。

ここでの分析は因果分析ではないものの、伝統的に言われる知育・体育・徳育の調和的な発達にとつての家庭環境の重要性があらためて確認されたと言ってよい（概念図参照）。

表5) 学力・体力・モラルに関する項目の相関係数分析2
家庭の教育力と学力・体力・モラルの関係

		家 庭 の 教 育 力	学 力	体 力	モ ラ ル
家 庭 の 教 育 力	Pearsonの相関係数 有意確立（両側） N	1 47	.322* .027 47	.652** .000 47	.711** .000 47
学 力	Pearsonの相関係数 有意確立（両側） N	.322* .027 47	1 47	.513** .000 47	.210 .156 47
体 力	Pearsonの相関係数 有意確立（両側） N	.652** .000 47	.513** .000 47	1 47	.397** .006 47
モ ラ ル	Pearsonの相関係数 有意確立（両側） N	.711 .000 47	.210 .156 47	.397** .006 47	1 47

*. 相関係数は5%水準で有意（両側）

** . 相関係数は1%水準で有意（両側）

以上のように、47都道府県分のデータを用いても、家庭の教育力が学力・体力・モラルと深い関係にあることがわかる。よって、沖縄と秋田との比較によって見えてきたことは、偶然の結果ではないと言える。

このように、沖縄の生活習慣の乱れとそれともなう学力低下には、家庭の教育力の弱さが関わっていると言わざるをえない。もちろん子どもだけの責任ではなく保護者の教育意識の問題と言える。朝食をきちんと食べさせる、子どもが夜更かしをしていたら注意をする、こうした日々の家庭における保護者の関わり方、行動の仕方、ものの考え方が重要であり、そうした家庭の支援があつてはじめて、学力向上が期待できる。

ちなみに秋田では、沖縄のように親が子どもを車で送迎する姿はほとんど見られず、集団登校で歩

いて通学し、「朝マラソン」を毎朝実施している小学校も多い。

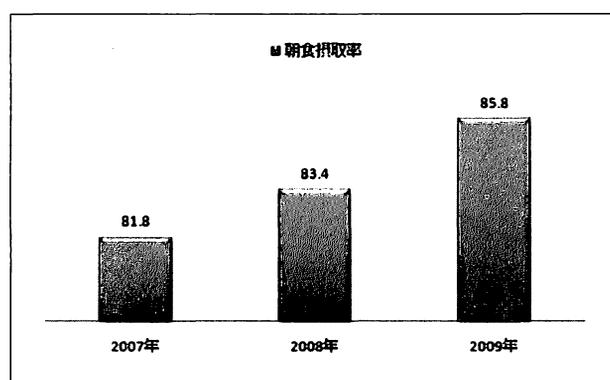
沖縄には、経済的にゆとりがないため子どもと丁寧に向き合えない家庭も多く、行政の経済的支援等も必要であろう。しかし、早寝早起きなど心掛け次第でできることもある。子どもたちの未来を開くために、あきらめることなく、できることから取り組むことが大切である。

おわりに～データを示し続けることの大切さ

講演では以上のように、データを示しながら、学力にとっての生活習慣確立の重要性について述べるわけであるが、どちらかと言うと暗い話が多いのが難点である。よって講演の最後には、少し明るめの話をするにしている。

本稿の前半で、沖縄は学力テスト3年目にして、小学生で最下位を脱出した科目があることを紹介した。こうした明るい兆しと関連したデータについて、最後にふれておきたい。

グラフ12は、全国学力・学習状況調査が始まった2007年から2009年の朝食摂取率の変化について、沖縄の小学生の場合で示したものである。



グラフ13) 近年の朝食摂取率の変化（沖縄県の小学生）

ここからわかるように、2007年調査では81.3%であったのに対し、2008年調査では83.4%、2009年は85.8%に上昇している。近年、文科省は「早寝早起き朝ごはん国民推進運動」を進めており、また全国学力・学習状況調査等、多くの調査を通して、朝食を中心とした生活習慣と学力が密接に関連していることが指摘され続けている。私自身も先に紹介したように、できるだけ多くの機会を設け、新聞紙上や講演活動を通してデータを示し続けている。このような変化は、データを示し続けること、言い続けることにも一定の効果があるということを示唆しているのではないだろうか。もちろん私一人の力ではなく、多くの教育関係者の努力の賜であると言えるが、徐々に学力にとっての、朝食の重要性、生活習慣の重要性が認識され始め、それが朝食摂取率の上昇へと結びついているのではないだろうか。そして学力の上昇（沖縄の小学生の最下位脱出）は、その一つの効果と言えるのではないだろうか。

実際、私が分析、講演に関わった学校の学力は向上する傾向にある。学力得点が県平均も市平均も下回っていたある小学校は、今では県平均も市平均も超えている。この小学校は参観日に合わせて講演会を設定した。まず授業では、全国学力テストの問題を振り返る内容を取り扱う。ここで保護者は、全国学力テストがどのようなものなのか、国語や算数の問題はどのようなものが出題されているのか、我が子の点数は何点くらいか等を知ることができる。それに続いて講演会では、全国学力テストのデータ分析結果が示される。そこで保護者は、我が子が本校平均より上なのか下なのか、生活習慣の確立の重要性などを知る。講演会終了後は再び教室に戻り、親子で「がんばりノート」を作ることによって、学習計画、就寝時刻の設定等、これまでの生活を振り返り反省しながら、1週間のスケジュールを立てていく。これにより保護者の意識が高まり、計画に基づいて規則正しい生活習慣が確立され、

学力向上に繋がったものと考えられる。

また、全国学力調査の「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対しても、沖縄の子どもの回答率は毎年全国平均よりも高い。例えば2009年の小学生データでは、持っている率で全国平均70.0%に対して沖縄平均72.0%である。今やニートと呼ばれるような、働く意欲もなくその準備もしない若者の増加が社会問題となっているが、その意味では沖縄の子どもたちは優秀と言えよう。

ただし、目標を達成するための具体的な努力をしていないのも沖縄の子どもの特徴である。目標を持てば、今何をすべきかがわかる。しかしそうした努力をする体制が整っていないのである。そうした努力を支えるのも家庭の教育力である。子どもたちが夢に向かって頑張れるよう支援するのが、家庭の役割と言えるだろう。

あまり知られていないが、現在学力1位の秋田県は実は45年前の全国学力テストでは最下位であった（沖縄県は復帰前で参加していないが）。生活習慣を確立することにより、40年かけてトップになったのである。また、沖縄の低学力を経済問題と結びつけて論ずる傾向が専門家の間にも見られるが、確かに沖縄は県民所得最下位で厳しい状況にあるが、秋田も決して高くなく、ずっと40位台、最新のデータでも36位である⁽³⁾。ここでは詳細にふれることはできなかったが、琉球新報2009年7月4日付で紹介されたように、私が各県の県民所得と学力の関係を検討した研究結果によると、所得と学力の関係はほぼ無相関であった⁽⁴⁾。このことから学力問題を経済問題にのみ収束させて議論するやり方は生産的でないと私は見ている。

私は、沖縄の保護者が教育不熱心だとは思っていない。むしろ熱心さが空回りしている場合も多い。先ほどもふれた車で送迎も、ある意味、子どもの教育に対する熱心さの表れとも言える。ただ方向性が間違っているだけであろう。夜遅く居酒屋を走り回る光景も、子どもを一人で留守番させるのはかわいそう、だから「もあい」の席に子連れで参加するという、ある意味子ども想いの行動とも言える。しかし子どもの生活リズムを整えるという観点から言えば、この行動は決して望ましいものではない。

このように、保護者の熱心さの空回りさえ修正していけば、徐々によい方向に進むのではないだろうか。朝食摂取率の上昇も、データを示して軌道修正さえすれば効果が表れるという一つの例であろう。

また沖縄の教師が不熱心だとも考えていない。秋田の教師と比べるとむしろ気の毒である。子どもの家庭環境の安定している秋田の教師は、学習指導から始められる。しかし、沖縄の教師は子どもの生活指導から入らなければならない、なかなか学習指導まで手が回らないという不利な現状もあるだろう。

現在、ACのキャンペーンで、「子どもは9時までに寝かせましょう」と呼びかけており、スーパーでは子どもに帰宅を促す放送が流れるようになってきている。例えば、居酒屋への子連れの入店は午後8時以降は禁止といったようなルールを作るなども有効な手段だろう。こうした社会全体で子どもを守り育てようとする取組も今後ますます重要となるだろう。さらに以上挙げたような家庭・教師・社会が一体となって、子どもを守り育てるという発想も大切だろう。

こうした保護者を対象とした生涯学習機会の提供を通して保護者の意識を高め、まずは早寝早起きなど、心がけ次第でできることから始め、徐々に沖縄の子どもたちの底上げに繋げていければ幸いである。

注釈

(1) 21COCEFについては以下のHPで確認できる。

<http://w3.u-ryukyu.ac.jp/okinawaedu/framepage1.html>

- (2) 平成21年度全国学力・学習状況調査の県別データは以下のHPで確認できる。
http://www.nier.go.jp/09chousakekka/06todoufuken_chousakekka_shiryou.htm
- (3) 『沖縄タイムス』(2010年2月20日)
- (4) 『琉球新報』(2009年7月4日)

主要参考文献

- 苅谷剛彦・志水宏吉編, 2004, 『学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書房。
- Bourdieu, P. & Passeron, J.C. 1970, 宮島喬訳『再生産』藤原書店。
- 原純輔・盛山和夫 1999, 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会。
- Bernstein, B. 1971, Class, Code and Control, Vol.1, Routledge & Kegan Paul.
- 原田彰編著 2003, 『学力問題へのアプローチ—マイノリティと階層の視点から』多賀出版。
- 池田寛 2000, 『学力と自己概念』解放出版社。
- 耳塚寛明 2007, 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集, 23-39頁。
- 西本裕輝 2002 「沖縄の低学力問題に関する実証的研究」琉球大学法文学部編『人間科学(琉球大学法文学部人間科学科紀要)』第9号, pp.1-18.
- 西本裕輝 2008 「沖縄の低学力問題に関する実証的研究(2)」琉球大学法文学部編『人間科学(琉球大学法文学部人間科学科紀要)』第21号, pp.183-221.